

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	岩島 陽										
2. 審査委員	<table border="0"> <tr> <td>主 査：(岐阜大学教授)</td> <td>平 澤 紀 子</td> </tr> <tr> <td>副主査：(兵庫教育大学教授)</td> <td>井 澤 信 三</td> </tr> <tr> <td>委 員：(滋賀大学教授)</td> <td>大 平 雅 子</td> </tr> <tr> <td>委 員：(岐阜大学教授)</td> <td>吉 澤 寛 之</td> </tr> <tr> <td>委 員：(岐阜大学准教授)</td> <td>芥 川 祐 征</td> </tr> </table>	主 査：(岐阜大学教授)	平 澤 紀 子	副主査：(兵庫教育大学教授)	井 澤 信 三	委 員：(滋賀大学教授)	大 平 雅 子	委 員：(岐阜大学教授)	吉 澤 寛 之	委 員：(岐阜大学准教授)	芥 川 祐 征
主 査：(岐阜大学教授)	平 澤 紀 子										
副主査：(兵庫教育大学教授)	井 澤 信 三										
委 員：(滋賀大学教授)	大 平 雅 子										
委 員：(岐阜大学教授)	吉 澤 寛 之										
委 員：(岐阜大学准教授)	芥 川 祐 征										
<p>3. 論文題目</p> <p style="text-align: center;">児童が主体となるポジティブ行動支援に関する研究—児童の認め合う関係を通じた課題解決に向けて—</p>											
<p>4. 審査結果の要旨</p> <p>先端課題実践開発専攻先端課題実践開発連合講座 岩島陽から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：令和8年1月27日（火）15時40分～16時20分 場 所：オンライン会議システムによる実施</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>第1章 問題と目的</p> <p>第1節 問題の背景</p> <p>第2節 ピア・サポート（Peer Support）の実践研究</p> <p>第3節 ポジティブ行動支援（Positive Behavior Support：PBS）の実践研究</p> <p>第4節 研究仮説と目的</p> <p>第2章 教師が児童と行うPBSの実践</p> <p>第1節 目的</p> <p>第2節 方法</p> <p>第3節 結果</p> <p>第4節 考察</p> <p>第3章 児童がPBSを学習して行うPBSの実践</p> <p>第1節 目的</p> <p>第2節 方法</p> <p>第3節 結果</p> <p>第4節 考察</p> <p>第4章 PBSを学習した児童が未学習の児童と行うPBSの実践</p> <p>第1節 目的</p> <p>第2節 方法</p> <p>第3節 結果</p> <p>第4節 考察</p> <p>第5章 児童が行うPBSに参加した児童側からの検討</p> <p>第1節 目的</p> <p>第2節 方法</p>											

第3節	結果
第4節	考察
第6章	総合考察
第1節	本研究の概要
第2節	児童の学習
第3節	教師の支援
第4節	結論と課題, 今後の展望

付記

引用文献

謝辞

本研究は、児童が仲間との認め合う関係を通じて課題解決に臨むという教育課題を、これまでに未解明な「児童が主体となるポジティブ行動支援 (Positive behavior Support: PBS)」を主題として、教育現場における実践から検討することを目的としている。

第1章では、今日の教育課題である児童の認め合う関係を通じた課題解決に関して、関連するピア・サポートとPBSの実践研究の課題を検討した。そして、これまでの研究で未解明な、児童がPBSの考え方や方法を学習することで、児童が自らの課題意識に基づき、認め合う関係を通じた解決策を計画し、実行、評価改善できるのではないかとという研究仮説を立てた。

第2章では、教師が児童と行うPBSの実践から、教師が主導することと児童が行うことを検討した。児童会の取り組みにおいて、教師が、現状を把握する必要性、課題の同定、計画や評価改善を提案することで、児童が課題解決のプロセスに関与でき、目標行動が増加した。とくに「できていることやがんばっていることに注目する」というPBSの考え方を伝えることで、児童がポジティブな方法での関わり方を考えられるようになった。この結果から、本手続きを基本とし、児童がより主体となる検討が必要であることが示された。

第3章では、教師が学級の児童と行うPBSの実践から、児童がPBSの考え方や方法を学習すれば、児童が主体となり課題解決ができるのではないかとという仮説を検討した。教師が「できていることやがんばっていることに注目する応援方法である」というPBSの考え方や方法を教えた。その結果、児童が自分達の「学級目標のお互いに学び合い認め合うことで成長することができていない」という課題意識に基づき目標行動や応援行動を考えることができ、その実行により目標行動が増加した。また、実践後に、他の課題を解決したいとの意見がみられた。このことから仮説は支持された。

第4章では、第3章から、PBSの経験が自分達の課題意識や解決策の計画実行の主体性につながると考えられたために、PBSを学習した児童が未学習の児童と行うPBSの実践において、どのような教師の支援が必要なのかを検討すれば、児童が主体となるPBSの実践が明らかにされるのではないかとという仮説を検討した。教師が児童会に話し合いの機会を設定し、課題解決を助言した。その結果、PBSを学習した児童が、未学習の児童にPBSの考え方や方法を教えることができた。そして、自分達の「運動場で遊ぶ児童が少ない」という課題意識に基づき解決策の計画、実行、評価改善を行い、課題を解決できることが明らかになった。このことから仮説は支持されたが、教師が児童の多様な状況を踏まえた計画等、助言する必要があることも示された。

第5章では、PBSに参加した児童側のアンケートから、児童が主体となるPBSに必要な児童の学習や教師の支援を明らかにした。PBSの目標や方法、結果に関する4項目において8割以上の児童は、肯定的評価であった。学校生活が楽しくなるに関しては7割程であった。この結果から、参加した児童が課題意識を共有し、課題の同定や計画に携わることが重要であり、教師は、児童会と参加者がPBSの初期段階から関わられる仕組みを考えることが必要であることが示唆された。

第6章では、第2章、3章、4章における児童の取り組みの違いから、仮説を総合的に検討した。その結果、児童がPBSの考え方と方法を学習し、自らの課題意識に基づいた解決策を計画、実行、評価改善を経験することで、児童が主体となるPBSの実践が可能であることが明らかにされた。本結果から、児童が望ましい行動に注目して、それを応援するという考え方や方法を学ぶこと、教師が課題解決の機会を設け、課題意識の明確化や、課題の同定、計画実行、評価改善について助言しながら、児童の成長を促すことが重要であると結論した。とくにPBSを学習した児童を中心とした課題解決の機会は児童同士の学び合いや成長に貢献する。最後にこれらを踏まえた本研究の教育的意義と、高学年の児童を対象とした制限等について論じ、今後の課題を明らかにした。

2. 審査経過

論文の審査においては、本研究の研究構造や教育的意義が評価されるとともに、児童の課題解決における重要事項、内発的動機づけとの関連、データの信頼性、目標行動の社会的妥当性に関する質疑がなされた。岩島氏は、先行研究や本研究の知見を基に、いずれの質問にも明確に回答し、児童がPBSの考え方や方法を学習することの重要性と意義を説明した。

審査を通じて、以下のことが確認された。本研究は、児童が仲間との認め合う関係を通じて課題解決に臨むという教育課題を、これまでに未解明な「児童が主体となるポジティブ行動支援

(Positive behavior Support : PBS)」から検討しているところに独創性がある。また、本研究は、学級や学校の現状について、児童自らが課題意識をもち、認め合う関係を育みながら、解決していくための知見であり、学校教育の充実に資する。今後、対象学年や対象活動、実施者を拡大した検討により、汎用的な知見になると考えられる。このことから、本研究は、学位論文の審査基準に示されている研究態度、論理性、情報探索力を満たしていることが確認された。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は、岩島陽の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。